

京都大学案内2019

知と自由への誘い



KYOTO UNIVERSITY
GUIDE BOOK
2019



は、おもろい。

京都大学の基本理念(抜粋)

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

■教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する(平成13年12月4日制定)。

アドミッション・ポリシー

京都大学は、日本の文化、学術が育まれてきた京都の地に創設された国立の総合大学として、社会の各方面で活躍する人材を数多く養成してきました。創立から1世紀以上を経た21世紀の今日も、建学以来の「自由の学風」と学術の伝統を大切にしながら、教育、研究活動をおこなっています。

京都大学は、教育に関する基本理念として「対話を根幹とした自学自習」を掲げています。京都大学の目指す教育は、学生が教員から高度の知識や技術を習得しつつ、同時に周囲の多くの人々とともに研鑽を積みながら、主体的に学問を深めることができるように教養をすることです。なぜなら、自らの努力で得た知見こそが、次の学術展開につながる大きな力となるからです。このため、京都大学は、学生諸君に、大学に集う教職員、学生、留学生など多くの人々との交流を通じて、自ら学び、自ら幅広く課題を探索し、解決への道を切り拓く能力を養うことを期待するとともに、その努力を強く支援します。このような方針のもと、優れた学知を継承し創造的な精神を養い育てる教育を実践するため、自ら積極的に取り組む主体性をもった人を求めています。

京都大学は、その高度で独創的な研究により世界によく知られています。そうした研究は共通して、多様な世界観・自然観・人間観に基づき、自由な発想から生まれたものであると同時に、学問の基礎を大切に研究、ないし基礎そのものを極める研究であります。優れた研究は必ず確固たる基礎的学識の上に成り立っています。

京都大学が入学を希望する者に求めるものは、以下に掲げる基礎的な学力です。

〈1〉高等学校の教育課程の教科・科目の修得により培われる分析力と俯瞰力

〈2〉高等学校の教育課程の教科・科目で修得した内容を活用する力

〈3〉外国語運用能力を含むコミュニケーションに関する力

このような基礎的な学力があってはじめて、入学者は、京都大学が理念として掲げる「自学自習」の教育を通じ、自らの自由な発想を生かしたより高度な学びへ進むことが可能となります。

京都大学は、本学の学風と理念を理解して、意欲と主体性をもって勉学に励むことのできる人を国内外から広く受け入れます。

受入れにおいては、各学部の理念と教育目的に応じて、その必要とするところにしたがい、入学者を選抜します。一般入試では、教科・科目等を定めて、大学入試センター試験と個別学力検査の結果を用いて基礎学力を評価します。特色入試では、書類審査と各学部が定める方法により、高等学校での学修における行動や成果、個々の学部・学科の教育を受けるにふさわしい能力と志を評価します。

KYOTO UNIVERSITY GUIDE BOOK 2019 CONTENTS

■ 巻頭特集

- 001 Invitation to wisdom and freedom
"おもろい"京大の研究者による知と自由への誘い

■ Topics

- 012 京都大学 体験型 海外渡航支援制度
おもろチャレンジ
- 014 京都大学 高大接続を推進するためのポータルサイト
KNOT(ノット)

■ SPECIAL FEATURE

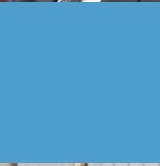
- 016 私たち、特色入試で京大生になりました。
- 020 京都大学の教育
- 022 各学部のアドミッションポリシー

■ 学部紹介

- 024 総合人間学部
- 028 文学部
- 032 教育学部
- 036 法学部
- 040 経済学部
- 044 理学部
- 048 医学部 医学科
- 052 医学部 人間健康科学科
- 056 薬学部
- 060 工学部
- 064 農学部
-
- 068 情報環境機構 / 図書館
- 070 海外留学・国際交流
- 072 大学院
- 074 卒業・修了後の進路
- 075 キャリア支援
- 076 男女共同参画推進センター
- 078 クラブ・サークル
- 080 生活サポート
- 082 京大生の生活 / キャンパスカレンダー
- 084 京大を知ろう! / インターネット出願 / 各種入試関連冊子(選抜要項等)について
- 086 平成30(2018)年度 入試の状況等
- 089 教員の研究テーマ
- 102 Campus Map & Access



京都大学百周年時計台記念館と大文字山



| 巻頭特集 |

Invitation to wisdom and freedom

おもろい

京大の研究者による 知と自由への誘い

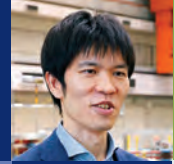
アジアの大学で最多9名^{*}のノーベル賞受賞者を輩出している京都大学。そうした成果の根幹は“知と自由”を尊重する学風とそこに根ざした“おもろい”を尊ぶ京都大学人の気風にあります。そうした京都大学の魅力を発信するのが、この巻頭特集「おもろい京大の研究者による知と自由への誘い」。“おもろい”14名それぞれの多様な視点、多様な発想、多様な生き方にもとづく“誘い”に共鳴し、人類の未来と自分自身のイノベーションをめざしてもらえたいことを願います。

※2018年4月1日現在

〈No.01〉山極壽一 京都大学総長

〈No.02〉山中伸弥 iPS細胞研究所長・教授

〈No.03~14〉附属研究所の研究者



地球社会の共存に 貢献しようとする 高い志をもつみなさんへ

01 山極 壽一 京都大学 総長

本年度創立121年を迎える京都大学は、日本を代表する総合大学として10学部に加え充実した大学院や全国一を誇る研究所群を擁し、海外にも50以上の研究拠点を展開しています。また、「対話を根幹とする自学自習」によって創造の精神を涵養する世界最高水準の学びの場を提供しています。これまで累計で208,614名の卒業生を世に送り出し、多くの卒業生が学術分野のみならず、産業界、官界など様々な分野で活躍しています。みなさんが京都大学で学ぶことはなにもにもかえがたい経験となるはずで、京都の世界に誇る歴史と文化の都です。みなさんは千年以上続いた日本の文化や伝統を肌で感じつつ、それを革新していく姿勢を京都の地で学ぶこととなります。古典から現代先端技術にいたるまで幅広い知識を身につけ、大局的にものを見、自由に発想できるようになるためには、旺盛な知識欲を満足させうる優れた教育環境と学んだことを我が物とする沈潜の時が必要です。現に各界で活躍する卒業生は、京都大学で学んだからこそ、学問を通じて、学問の源流や本来あるべき人間社会の姿というものに思いをはせつつ、確固たる人生の礎を築くことができたこと異口同音に語っています。

京都大学では、人文学、社会科学、自然科学の各分野で様々な独創的な研究がなされています。本学の研究の多様性とユニークさは群を抜いており、霊長類研究やiPS細胞研究などはその一端を示すものにすぎません。これらの先端的研究を担う研究者たちが、初年次教育から連携して参加し、全学体制で基礎・教養教育を行うのが京都大学の特色です。みなさんは、1年生からの少人数ゼミ「ILASセミナー」などを通じて、独創的な研究を行っている研究者から最先端の研究の手ほどきを受けることとなります。人間は地球上の小さな存在ながら、その行いが地球全体の様相を変える可能性を秘めた存在です。その可能性と責任を胸に、将来世界を舞台に活躍するリーダーとして地球社会の調和と共存に貢献しようという高い志を持つみなさん。自由で知的刺激にあふれた大学、京都大学はみなさんの未来の飛翔のための翼を整える大学でありたいと総長として願っています。ぜひ、京都大学でそのときを迎えてください。

京都大学には先達9名の方々に続き

ノーベル賞を受賞する人を育てることに

“本気”で取り組む教員が何名もいます

京都大学が国内はもちろん、アジアの大学で最多となる9名[※]ものノーベル賞受賞者を輩出してきたことは、誰もが知ることでしょう。その要因のひとつは“自由の学風”に基づく「対話を根幹とする自学自習」が促す創造精神の涵養にあるわけですが、それは“これまで”に限ったことではありません。“自由の学風”は今の京都大学にもしっかり息づいており、誰もが9名の先達と同様に、次のノーベル賞受賞者をめざすことができるのです。また、ノーベル賞を受賞する人を育てることに“本気”で取り組む教員が何名もいるのも京都大学ならではのあり、それを“自身への期待”と受けとめる学生たちも決して少なくありません。

※2018年4月1日現在



山極 壽一(やまぎわ じゅいち)

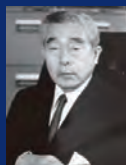
Profile ● 1952年、東京都に生れる。1975年の京都大学理学部卒業後、1980年に同大学院理学研究科博士後期課程を修了。(財)日本モンキーセンターリサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手、同大学院理学研究科教授などを経て、2014年10月より京都大学総長。大学院生だった1978年からアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探り続ける霊長類研究の第一人者。著書に『家族進化論』(東京大学出版会)、『オトコの進化論』(ちくま新書)、『ゴリラ』(東京大学出版会)、『暴力はどこからきたか』(NHKブックス)、『サル化する人間社会』(集英社インターナショナル)など。



1949
物理学賞
湯川 秀樹



1965
物理学賞
朝永 振一郎



1981
化学賞
福井 謙一



1987
生理学・医学賞
利根川 進



2001
化学賞
野依 良治



2008
物理学賞
小林 誠



2008
物理学賞
益川 敏英



2012
生理学・医学賞
山中 伸弥



2014
物理学賞
赤崎 勇

私自身の経験を振り返りながら 2つのメッセージをお伝えしましょう

02 山中 伸弥 iPS細胞研究所 所長・教授

目を閉じて大学時代を思い返してみると、医師を目指して学んだ日々、高みを目指して仲間と切磋琢磨しながらラグビーの練習に励んでいた日々が昨日のように感じられます。素晴らしい恩師や仲間を支えられた大学時代でした。

これから京都大学を目指そうとされるみなさんに、私自身の経験を振り返りながら、2つのメッセージをお伝えしたいと思います。

ひとつは、みなさんにぜひ「ビジョン」を持っていただきたいということです。

私は大学を卒業後、整形外科医になりました。中学時代から柔道やラグビーといったスポーツをしてよく骨折をしたこともあり、スポーツ選手のケガを治して、再び現場に復帰して活躍してもらう、スポーツ

医学に憧れていたのです。しかし、いざ整形外科医となって臨床に出てみると、治療法のない患者さんの症状がどんどん悪くなっていくのを目の当たりにすることがありました。そして、「今治らない病気やケガを将来治せるようにしたい」と強く思うようになりました。これが、私のビジョンです。

「今の医療の限界を超えるには研究しかない」と医師から研究者に転向しましたが、それから今までこのビジョンは変わっていません。このビジョンを達成するため、「iPS細胞技術を使って1日も早く患者さんに新しい治療法を届ける」ことを目標に、iPS細胞研究所のみならず一丸となって研究に励んでいます。

「こんなことを成し遂げたい」、「あんなことができるようになりたい」、



どんなビジョンでも構いません。みなさん、それぞれのビジョンを見つけてください。ビジョンを持ったら、また、すでにビジョンを持っている方は、それに向かって努力を惜みず、突き進んでください。きっとビジョンは、これからの皆さんの進路あるいは人生の道標となってくれることでしょう。

もうひとつのメッセージは、「失敗を恐れずに挑戦してほしい」ということです。

私がまだ若き研究者だったとき、指導教官と立てた仮説を検証するべく実験を行いました。すると、仮説と真逆のことを示す予想外の結果が得られました。期待していた結果が得られなかったのですが、その実験は「失敗」だと残念がってもおかしくなかったのですが、私はむしろワクワクしたのを覚えています。

そして、その一見「失敗」と思われる結果に引きずられるようにして研究を進めていき、iPS細胞を開発するに至りました。

研究において失敗はつきものです。実験をすると、ほとんどは失敗です。これは研究だけではなく、人生においても言えると思います。様々なかたちで成功を収めてきた人を見ても、失敗なくしてその成功を手にした人はそういません。私たちはつい「失敗は怖い」と思いがちですが、失敗があるから新たに分かったり、見えてきたりすることはたくさんあります。失敗は財産とも言えるのです。失敗が多ければ多いほど成長し、そして自分のビジョンを見つけていくことができると思います。ですからみなさんも、失敗を恐れずにいろいろなことにチャレンジしてください。

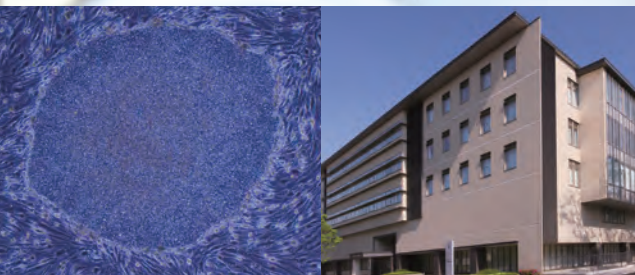
私が京都大学に来たのは2004年ですが、10年以上経った今でも、素晴らしい環境で日々研究ができていると感じています。京都大学の近くには鴨川や吉田山、哲学の道など、四季折々に異なる顔を見せる自然に触れられる場所があり、研究の合間にリフレッシュをし、さらに良いマインドで研究に励むことができます。

また、京都は歴史と伝統に溢れる都市でありながら、最先端の研究や取り組みを多くしている都市でもあります。「歴史と伝統」と「最先端」が共存しているのは、京都ならではの大きな魅力です。京都には海外から訪れる方も多く、日本にいながら多文化を身近に感じられる都市でもあります。

そして、何より、京都大学にはあらゆる分野において世界で最先端のご活躍をされている先生方がたくさんいらっしゃいます。幅広い教養から深い専門的な知識や技能まで、みなさんの高い知的好奇心を様々なかたちで満たせる場所です。また、みなさんの学びをサポートする体制も充実しています。京都大学にはみなさんの力を伸ばし、可能性を開いてくれる環境があると自信を持って言うことができます。

伝統的に「自由の学風」をもつ京都大学。みなさんがその良さを最大限に生かして勉学やスポーツなど様々な活動に励み、多くの経験や人との繋がりを培いながら、これからの人生の新たな礎を築かれることを願っております。

みなさんの今後の実りある大学生活を、心から応援しています。

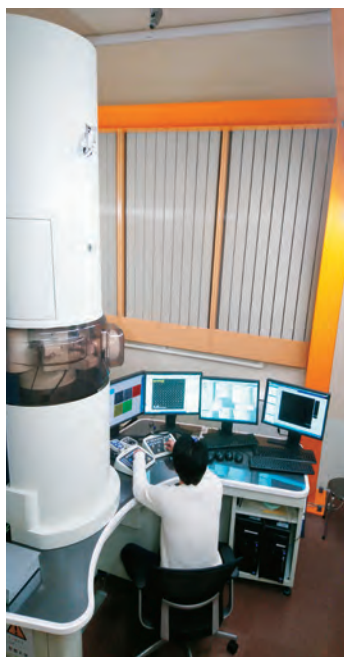
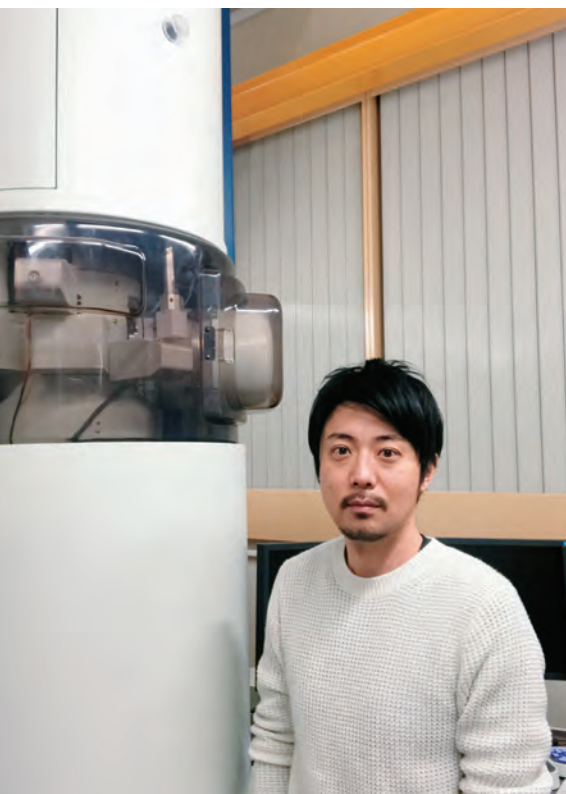


京都大学iPS細胞研究所

Center for iPS Cell Research and Application

京都大学iPS細胞研究所(CiRA)は、体のあらゆる細胞に変化する能力とほぼ無限に増殖する能力をもつ人工多能性幹細胞(iPS細胞*)の医学応用を使命に、2010年に設立されました。2015年8月には、再生医療に使用可能なiPS細胞ストックの提供を開始しています。

*induced Pluripotent Stem cell



異分野交流が刺激になって とても“おもろい”研究成果が 続々と生れています

化学研究所には90年以上の歴史と伝統があります。「化学」の名前こそついていますが、実は理学から工学、農学、薬学、医学、情報学まで、驚くほど幅広い分野の30研究室が集まっていて、とても“おもろい”異分野交流ができるのです。実際、年間を通じていろんなイベントがあり、異分野の研究者と話す機会はたくさんあります。もちろん分野がちがえば、まったく理解できないことも多々ありますが、私が取り組む原子レベルでの材料分析のヒントになることも少なくありません。そんな化学研究所では、国内や海外はもちろん、“所内”でも多くの共同研究が行われていて、“おもろい”研究成果が続々と生まれています。

03

化学研究所

治田 充貴 先端ビームナノ科学センター 助教

私が所属する人文研には、古代中国の甲骨文やガンダーラの石彫から、18世紀にヨーロッパで出版されたアベ・プレヴォ編『旅行記大全』や近代日本の地図まで、世界各地の宝物が収蔵されています。また、いろいろな専門家が世界の東西南北から集まってきていて、各々が興味深いと感じているテーマを研究しています。言語学、人類学、医学史、文字コード論、メディア・スタディーズ、デジタル・ヒューマニティーズ、他にもいろいろあって……さまざまな専門家が個人研究だけでなく、「共同研究」と呼ばれる自由な“おしゃべり”を通じて人文学の面白いところを追究し、その意義を世界の文化交差点、人文研から世界に発信しています。

04

人文科学研究所

ホルカ・イリナ (HOLCA Irina) 講師

自由な“おしゃべり”を通じ
人文学の面白さを追究する
ここは世界の文化交差点



「Scrisori din Cipangu / 日本からの手紙」というタイトルのとおり、すべて日本を舞台とした短編小説集のカバー。ホルカ講師をはじめとするルーマニア出身の14人が、ルーマニア語で書いています。



母校の京大に研究者として戻れ 素直にうれしく思っています



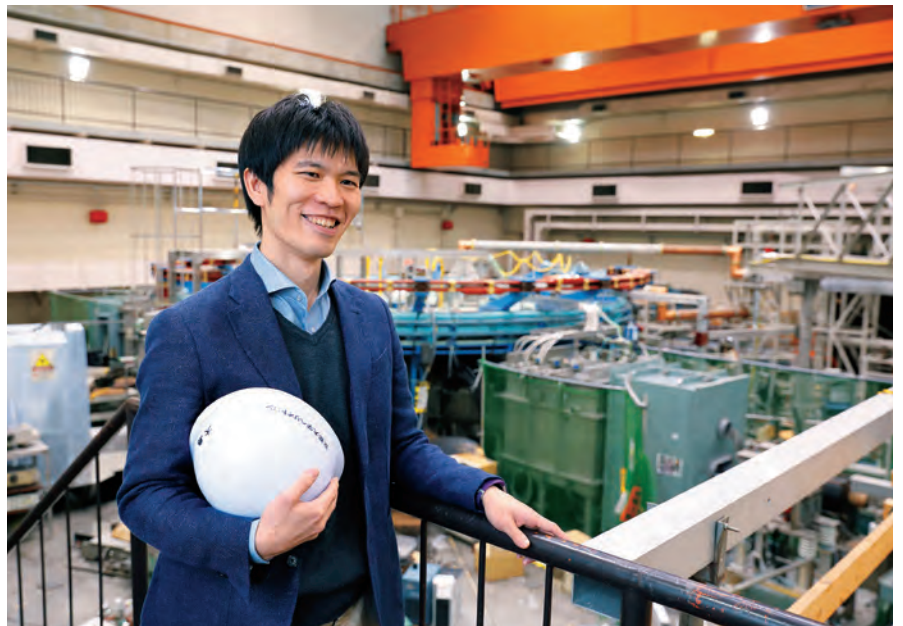
当研究所では、エイズや新型インフルエンザ、ヒトT細胞白血病、B型・C型肝炎などのウイルス感染症、高齢化社会に必要な不可欠な再生医療、これらの研究を進めています。但し研究対象は“生命科学”と広く定義できるため、免疫学や神経発生学、細胞生物学やシステムバイオロジーなど、多様な領域の研究も行われています。研究環境もとても充実しており、マウスはもちろん、サルなどの霊長類を使った実験もしています。また、京大が誇る“自由の学風”を活かし、所属する研究者は国内外の専門家と自由にコミュニケーションをとって協力しあい、興味深い研究に取り組んでいます。私自身、アメリカへの留学や他大学を経て、母校の京大に研究者として戻ってこれたことが素直にうれしく、とても“おもろい”毎日過ごしています。

ウイルス・再生医科学研究所

三野 享史 助教

05

あらゆる文明活動から自然現象に至るまで、すべての本質はエネルギーの変換・移送過程と捉えられます。当研究所では、生物細胞中のエネルギー移送から太陽光発電、恒星が燃えるエネルギーを地球上で実現する核融合まで、多角的なエネルギー研究を進めています。これらは人類社会の根幹を支えるエネルギーの諸問題に対峙し、今後の文明の維持・存続に挑む、重要かつ“おもろい”研究です。私自身はエネルギー問題を一挙に解決する可能性をもつ核融合(ガンダムの動力源!!)をめざし、1億度もの超高温プラズマが示す未知の物理現象を解明するための実験を京大の独自装置「ヘリオトロンJ」で行っています。世界中の研究者と共に“地上の太陽”の実現を夢見て、国際的に協力しながら、ときには競争しながら、日々奮闘しています。



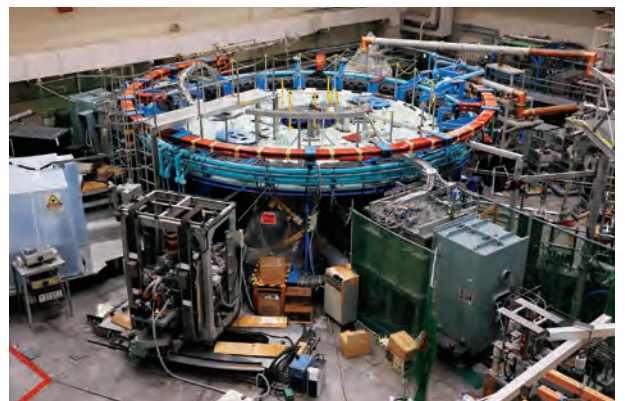
数千万度の超高温プラズマを発生させる京大独自の「ヘリオトロンJ」装置。

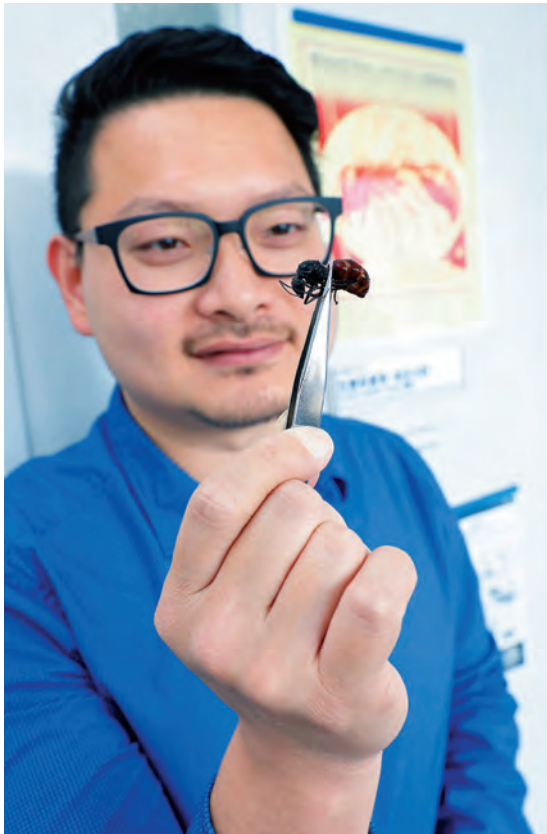
京大の独自装置「ヘリオトロンJ」を用い もはやSFではない“地上の太陽”の実現を

06

エネルギー理工学研究所

大島 慎介 助教





台湾が生まれ故郷のヤン講師。研究対象であり“相棒”の蟻(あり)をこよなく愛する。

Invasion Biology as a new discipline of Humanosphere Science

Have you ever had a crayfish(アメリカザリガニ) as a pet during your childhood? Have you ever seen a nutria(ヌートリア) swimming in Kamogawa? Despite the popularity, both animals in fact are notorious invasive alien species(IAS) that were introduced into Japan in early 20th century and spread rapidly throughout the entire country since then. Unlike those with larger body size, a group of tiny, nearly invisible IAS is sneaking into Japan without drawing too much attention: invasive ants. The invasive ants are capable of causing extinctions of native species, reducing biodiversity, competing with native organisms, and eventually altering habitats. To mitigate impacts of invasive ants, Dr. Chin-Cheng Yang and his research team at Research Institute for Sustainable Humanosphere(RISH) seek to understand various mechanisms underlying their success (genetics, behavior and adaptation), with an ultimate goal to provide decision support for managing invasive ants in Japan. Recently, Dr. Yang may have found a way to manage the invasive yellow crazy ant (YCA), arguably the world's most devastating ant species, in a more efficient manner. In most ant species, workers are non-reproductive and primarily engaged in nest maintenance activities. The workers of YCA, however, are able to produce trophic eggs that serve as food for other members in the nest. Such behavior may assist YCA in overcoming unfavorable conditions (i.e., paucity of food) and hence improve its survival in the field. This finding suggests that suppressing ovary development of worker by using reproduction-inhibiting chemicals as a major control method might represent an alternative strategy to target YCA invasion. More research outcomes regarding invasive ants are currently being generated in Dr. Yang's laboratory. So, interested in studying invasive ants? Why not come to RISH, Kyoto University?

07 生存圏研究所 ヤン チンチェン(Chin-Cheng Yang) 講師

自由でフレンドリーな雰囲気、それが私たちの研究所です

私たちが研究する「防災」は、社会と密に関わる分野です。大きな自然災害が発生したら真っ先に調査に出向き、被災対応のサポートをしたり、被害の原因究明を行います。私自身は緊急地震速報の研究をしていますが、研究所には理学・工学・社会科学など、多様な分野の専門家が同居しており、わからないことがあったら気軽に質問できます。とてもフレンドリーな雰囲気で、社会に役立つ研究ができることに“やりがい”を感じています。

08 防災研究所 山田 真澄 助教



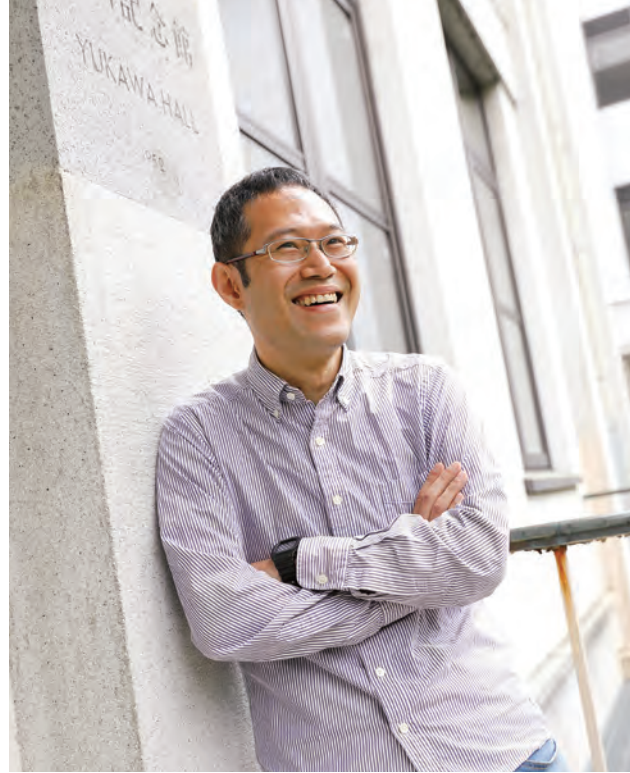
大学では建築の耐震構造を専攻、その原因である地震のメカニズムを物理学の観点から解明する研究に移行していった山田助教。そんな自由で幅広い研究も防災研究所ならではの。

京都好きの世界的な研究者が 四季折々に美しい京大に来られ “おもしろい”話をしてくれる

基礎物理学研究所に勤務する前は、数々の大学や研究所勤務を経験してきました。その際、「京大ってホントに自由なんだ」と驚いたのは、他の大学では必ずあった業務の説明がほぼなかったこと。また、担当授業や運営業務も驚くほど少なく、以来あり余る自由を謳歌しつつ、自己責任を強く感じながら素粒子論の研究に没頭しています。また、基礎物理学の世界的な研究者にも“京都好き”が多く、東京なら頼んでも来ないような人たちが四季折々に来学、研究会で“おもしろい”話をしてくださる。これほど“おもしろい”環境、わたしは他に知りません。



09 基礎物理学研究所
阿田 泰章 特定准教授



自他ともに認める日本最高の経済学研究機関は 思いのほか学際的です

経済学は経済活動の仕組みを研究する学問ですが、近年は隣接する社会科学、例えば法学や心理学、社会学といった分野との協働も盛んに行われています。さらに医学や工学などの理系分野でも、経済の問題は避けて通れません。なぜならどれほど優れた技術が開発されても、消費者が支払える程度の価格でなければ実用化できないからです。実際、私たちの経済研究所には教育学部や工学部、農学部といった他学部出身の研究者が在籍しており、皆さんが思っている以上に学際的です。国際性も豊かで、年間を通じて外国の大学から数多くの研究者を受け入れ、共同研究を行っています。また、所員の約半数は欧米の大学院を修了しており、みんな語学が達者です。そんな当研究所は多様性と知的刺激に充ち溢れ、自他ともに認める日本最高の経済学研究機関です。



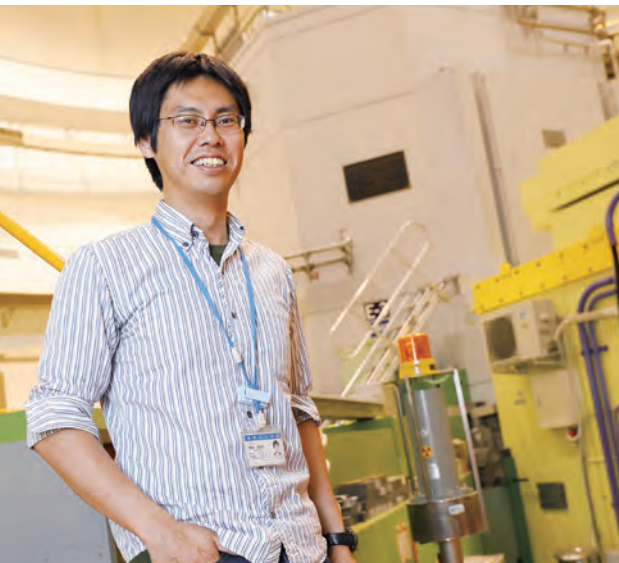
10 経済研究所
西山 慶彦 教授 副所長

若手に自由を与える数理研では 頑張らないわけにはいきません

数理解析研究所では純粋数学だけでなく、広く数理科学の研究が行われています。研究する分野の多様性のあられか、ここにはさまざまなタイプの研究者がいます。所員の個性的なエピソードも、当研究所の“おもしろい”ところなのですが、そのつもりはなくても「悪口」に聞こえてしまうかもしれませんので……ここでは控えます(笑)。さて、前説が長くなりましたが、私が最も“おもしろい”と思うのは「自由に研究できること」です。実際、多くの研究所には“運営のための業務”が数限りなくあるのですが、数理研はそれらから若手研究者を守ってくれます。なので若手研究者は諸々の業務から解放され、自由に研究できるのです。このような環境を与えられた方には、一所懸命に頑張らなくては……日々努力している次第であります。

数理解析研究所 **11**
星 裕一郎 准教授





京大は既存の枠にとらわれず 新しい分野を切り拓く研究に 最適な場に他なりません

私が勤務する複合原子力科学研究所では、原子炉や加速器の最先端研究はもちろん、それらによって創出された放射線を用い、多様な研究をしています。その特色は医学、理学、工学、農学、エネルギー科学など、さまざまな研究室が協働する分野横断的な研究環境にあります。例えば私自身は不安定原子核から出てくる光、ガンマ線を使ってモノの中にある原子・分子の運動を調べているのですが、生物や電池、鉄鋼材料など、幅広い分野の専門家が身近にいるおかげで日々新しい着想が浮かんできます。そんな京大や複合原子力科学研究所は既存の枠にとらわれず、新しい分野を切り拓く研究に最適な場だと実感しています。

12 複合原子力科学研究所
齋藤 真器名 助教

霊長類研究所は 「ヒトとはなにか？」を科学する研究所

「霊長類研究所ってなに?」。この質問にひとことで答えると「ヒトとはなにか?を科学する研究所」という上記の見出しになります。でも、よくわからないですね。実際、霊長研をひとことで説明するのは難しい。なぜなら霊長研には、フィールドに行く人、動物園に行く人、ラボにいる人、いろんな人がいます。また、生態・行動の調査・観察、化石の探索、脳や心理の解析、骨格の計測、細胞や遺伝子の操作、繁殖や感染症の制御など、目的も手法も異なる数多くの研究が同時進行しています。さらに京大なのに愛知にいたり、学生の3割強が留学生だったり、ヒトよりサルの方が多かったり、ネタは尽きません。そんな雑多で多様で自由な研究所。それが霊長研が誇る“おもろさ”です。どうです? 少し気になってきました? 詳しくは『霊長研』で検索!!

13 霊長類研究所
今村 公紀 助教



フィールドは東南アジアをはじめ 世界の諸地域に広がっています

当研究所には50年以上の歴史があり、標榜する東南アジアだけでなく、世界諸地域の農業、生態、経済、政治、歴史、医療などについて、分野の垣根をこえた自由闊達な議論をしています。そんな当研究所の魅力は“人間”です。ベンガル語を自在に操りつつゴムテープで補強した靴を履き、ひとつの電池式髭剃り機を使い続けて40年という“フィールドワーカーの権化”のような人、プロの登山家でもないのにヒマラヤの未踏7千メートル峰を3つも初登頂した人、講演で歌謡曲(山口百恵)を流し続ける人、そんな“おもろい”人ばかりです。また、私自身は医師ですが、小学6年生の頃から憧れ続けたブータン王国をフィールドに、地域医療のシステムづくりをしており、現地での活動には学生も参加してくれます。皆さんも私たちと一緒に世界各地の現場を訪ね、現実の悩みや感動を共有したいと思いませんか? 来春の出会い、待ってます!!

14 東南アジア地域研究研究所
坂本 龍太 准教授



学部から大学院へ、そして研究所へ

人々と地域・国際社会のより良い未来のために
有機的に連結する京都大学の教育・研究

専門性を応用・実践していく

附属の13研究所



専門性を高めて研究所につながっていく

20の大学院と専門職大学院



専門性の基礎を固めて大学院につながっていく

10学部

